

# 字音語素「効」による VN 修飾関係の 漢語についての考察

胡 新 祥

## 1 はじめに

現代中国語の中には「効命」（命を尽くす）、「効忠」（忠を尽くす）などのように、「効～」という構成を持つ二字漢語が数多く存在している。例えば、『漢語大詞典』（一九八六）に「効～」の構成を持つ二字漢語は六十八個<sup>(1)</sup>収録されている。六十八個のうち、漢籍に出典を持つのは六十四個があり、一方、「効率」「効果」「効益」「効程」の四つは漢籍に出典が見当たらず、中国語における歴史が浅いように思われる。

そして、漢籍に出典を持つ六十四個のうち、圧倒的に多いのは「効命」、「効忠」などのような「VN 動詞-目的語」構造である。しかし、「効力」「効能」「効用」の三つはかなり特殊な存在である。三者とも「VN 動詞-目的語」構造と「VN 修飾関係」構造を同時に有している。そして、同じ漢語なのに内部構造は「VN 動詞-目的語」か「VN 修飾関係」かによって意味合いが違ってくるのだ。

一例を挙げておく。「VN 動詞-目的語」構造の「効力」は漢籍に出典があったもので、本来「力を尽くす」という意味を表わす。一方、「VN 修飾関係」構造の「効力」は「効く力」という意味を表し、『漢語大詞典』（一九八六）の例文を見る限り、中国語における歴史が浅いように思われる。中国語の中では「VN 修飾関係」構造の二字漢語の生成はいろいろと制限され、生産性が低いとされている。一方、「効力」「効能」「効用」の三つは同時に「VN 動詞 - 目的語」構造と「VN 修飾関係」構造を有するのは実に考えるべきものである。

よって、本論文は「効力」「効能」「効用」の三つを中心に、中日対照言語学の立場から現代中国語の中の「効～」という構成を持つ二字漢語を考察しようとするものである。

## 2 「効力」についての考察

下記用例（1）（2）のように、現代中国語における「効力」には「力を尽くす」と「効く力」の二つの意味がある。「人民日報図文データベース」（一九四六～二〇二〇）で最新の一〇〇例を調べてみると、「力を尽くす」の用例は十六件であるのに対して、「効く力」の用例は八十四件で圧倒的に多い。

（1）我是炎黄子孫，要為自己的祖国効力。

（“布衣院士” 留下無字豐碑『人民日報』 二〇一九年十一月十四日）

（2）協議文本一式二份，均為中英兩種文本。兩個語種文本具有同等効力。

（“一份互利共贏的協議”『人民日報』 二〇二〇年一月十六日）

用例（1）の「力を尽くす」の「効力」は「VN 動詞-目的語」構造であるのに対して、用例（2）

の「効く力」の「効力」は「VN 修飾関係」構造である。なぜ「効力」は同時に二つの異なる構造を有しているか、陳力衛（二〇一九）には下記の記述がある。

另外構詞結構的轉換，也是引起詞義變化的原因之一。如在中文里本是動賓結構，是不成詞的，但近代日語將動賓結構改為定中結構，便形成了近代的新詞新義：愛人（人を愛する→愛する人）、効力（力を効する→効く力）。<sup>(2)</sup>

つまり、漢籍にあった「効力」は本来「VN 動詞-目的語」構造であり、「VN 修飾関係」構造は近代日本語において成立されたものである。参考のために、『漢語大詞典』（一九八六）と『日本国語大辞典』（二〇〇二）における「効力」の記述を下記の通りに抜粋しておく。

### 1、効勞，尽力。

①《呉子・図国》「樂以進戰，効力以顯其忠勇者，聚為一卒。」

### 2、功效；効驗。

②《三国志・魏志・辛毗伝》「陛下用思者，誠欲取其効力，不貴虛名也。」

③宋文同《和中蒙夜坐》「少睡始知茶効力，大寒須遣酒爭豪。」

④巴金《家》二五「覺慧的話果然發生了効力。」<sup>(3)</sup>（『漢語大詞典』一九八六）

何かに作用して、または、それを用いるとある効果を現わすことのできる力。

①経済小学〔一八六七〕上・雇直「雇作の徒己れが受取るべき雇直の増益せんことを欲せば、宜しく己れが作業の効力を顯はし財主をして大に之を買はんとするの心を起さしむべし」

②日誌字解〔一八六九〕〈岩崎茂実〉「効力 コウリョク チカラライダス」

③小説神髓〔一八八五～八六〕〈坪内逍遙〕上・小説の変遷「彼の奇異譚の時好に投じてめでもてはやさるるのみにはあらで且よく感孚（かんぶ）風動する至大の効力（カウリョク）あるをば見つ」

④文同-和仲蒙夜坐詩「少睡始知茶効力、大寒須遣酒爭豪」<sup>(4)</sup>

（『日本国語大辞典』二〇〇二）

中国の『漢語大詞典』では、「効く力」の「効力」の初出用例として、②「陛下用思者，誠欲取其効力，不貴虛名也。」（『三国志』陳寿）が挙げられているが、ここの「効力」は依然として「力を尽くす」という意味であり、用例採取の不備であろう。しかし、『漢語大詞典』の用例③と『日本国語大辞典』の用例④の「少睡始知茶効力、大寒須遣酒爭豪」は実に微妙なものである。

### 和仲蒙夜坐

宿鳥驚飛斷雁號，獨憑幽几靜塵勞。風鳴北戸霜威重，雲壓南山雪意高。

少睡始知茶效力，大寒須遣酒爭豪。硯冰已合燈花老，猶對群書擁敝袍。（宋 文同）

「少睡始知茶效力，大寒須遣酒爭豪」は現在、一般的に「夜、なかなか眠れず初めてお茶の効力を知り、大寒の夜、お酒を飲んで寒さを凌ぐべし。」と解釈されている。この解釈だとすると、文中の「効力」は「VN 修飾関係」構造の「効く力」を意味するようになる。そのためか、『日本国

語大辞典』のみならず、佐藤亨（二〇〇七）も「効力」（効く力）の由来をこの『和仲蒙夜坐』に求めている。

意味・出自 なにかにはたらきかけて、効果をあらわすことのできる力。文同・和仲蒙夜坐詩「少睡始知茶効力、大寒須遣酒争豪」<sup>(5)</sup>（佐藤亨 二〇〇七）

果たしてこの「効力」は「VN 修飾関係」構造か、筆者は以下の理由でそれを否定したい。

(1) 漢籍にある「効〜」という構成を持つ二字漢語は「VN 動詞-目的語」構造が多くて、「VV 並列」結構と「VA 動詞-補語」結構も少しあるが、「VN 修飾関係」構造は見当たらなかった。

(2) 「語料庫在線の古代漢語語料庫」、中央研究院の「漢籍電子文献資料庫」など複数の古代漢語データベースを調査したところ、「VN 修飾関係」構造の「効く力」の「効力」はこれ以外に一例も見当たらなかった。

(3) 「少睡始知茶効力、大寒須遣酒争豪」では、「茶効力」（茶が力を尽くす）と「酒争豪」（酒が豪を争う）の対関係になっている。

それでは、「効く力」の「効力」がいつ誕生したか。『日本国語大辞典』（二〇〇二）、そして佐藤亨（二〇〇七）は何れも一八六七年に成立された『経済小学』（神田孝平）を挙げている。

経済小学〔一八六七〕上・雇直「雇作の徒己れが受取るべき雇直の増益せんことを欲せば、宜しく己れが作業の効力を顕はし財主をして大に之を買はんとするの心を起さしむべし」

（『日本国語大辞典』 二〇〇二）

「次第二文明ノ域トナリカ如キ未タ嘗テ知識ノ効力ニ依ラスンハアラス」（神田孝平訳・慶應三年（一八六七）『経済小学』上 国民性行）<sup>(6)</sup>（佐藤亨 二〇〇七）

『経済小学』は神田孝平（一八三〇～一八九八）が一八六七年にオランダ語の『Grondtrekken der Staatshuishoudkunde』<sup>(7)</sup>を和訳したものである。いまのところ、「効力」（効く力）に関して、『経済小学』における用例が一番早かった。しかし、神田孝平の「効力」は「少睡始知茶効力」のなかの「効力」を「効く力」と理解して、そこから得たものか、それとも漢籍にあった「VN 動詞-目的語」構造の「効力」を意図的に「VN 修飾関係」構造に変えたものか、以下の理由で筆者は後者のほうだと考えている。

その理由（一）は『日本国語大辞典』の②日誌字解〔一八六九〕〈岩崎茂実〉「効力 コウリヨクチカラライダス」のように、当時の漢語手引書は依然として「効力」を漢籍に即して「力を尽くす」と解釈している。理由（二）は『経済小学』を調べた時に、下記のように「効力」の同義語として「VN 修飾関係」構造の「効用」（効く用）が併用されたことが分かった。しかし、漢籍にあった「効用」は本来「VN 動詞-目的語」構造で、「力、能力を尽くす」という意味であった。

此律ヲカルヘカラス然レトモ此律ノ効用ハ更ニ之ヨリ大ナル。（『経済小学』 一八六七）

以上のことから、神田孝平は意図的に「効力」「効用」を「VN 動詞-目的語」構造から「VN 修飾関係」構造に変えたと考えたほうが自然であろう。

「VN 修飾関係」構造の「効力」「効用」が成り得た理由は「効」という漢字に対する中日理解

の不一致である。中国語では「効」は「尽くす」「倣う」「甲斐」の三通りの意味を有している。特に「尽くす」「倣う」の「効」は他動詞であるため、「効命」「効法」などの「VN 動詞-目的語」構造を持つ漢語をたくさん造語できたが、「VN 修飾関係」構造の漢語を生成できなかった。中国語に対して、日本語では「効」は一般的に「きく、ききめ、甲斐」と訓読みされ、特に自動詞の「効く」が連体修飾語となり、「VN 修飾関係」構造の「効力」「効用」が生成できたのである。

少し話が逸れてしまうが、仏教関係の資料を調査したところ、下記のように「効く力」の「効力」を数件見つけた。

- (3) 育衆生者何。由斯之便成功徳故。所修効力不悵望福。所以無求。  
(『阿差末菩薩經』 竺法護)
- (4) 其藥能療八十四千種鬼神病。皆薰之造避他方。更不敢近。其不去者並皆碎滅。梵王自在大自在摩訶迦羅等皆走逃散。更不敢來。牛馬六畜等病亦得除愈爾時世尊。即説偈言：一切癩癩并諸瘡，梵王自在及諸天。藥叉羅刹并諸鬼，聞此香藥皆逃還。所有鬪戰及怨家，惡鬼人天並能伏。一切牛羊六畜病，鬼神聞香皆退散。如此効力不思議，並由佛頂神藥力。  
(『大佛頂廣聚陀羅尼經』 訳者不明)
- (5) 辨頑愚、明宗的。不是文殊虚効力。相似之談不要舒。  
(『汾陽無德禪師語録』又拄杖歌 楚圓)
- (6) 禪師慧威。依智者學心觀頓獲開悟。後受遺託造國清寺。凡所建立効力爲多。  
(『佛祖統紀』 志磐)

筆者の判断で用例(3)(4)(5)(6)の「効力」はいずれも「効く力」と解釈すべきである。特に用例(4)の「効力」は前後の文脈から見て、間違いなく「効く力」という意味である。仏教資料における「効力」と『経済小学』のなかの「効力」と何らかの関係があるかは慎重に判断すべきである。いずれにせよ、現代中国語における「VN 修飾関係」構造の「効力」は近代日本語のなかで成立されたものである。

### 3 「効用」についての考察

考察の便宜を図るために、まずは『漢語大詞典』(一九八六)と『日本国語大辞典』(二〇〇二)における「効用」の記述を下記の通りに示しておく。

#### 1、猶効勞。發揮作用。

- ①《尉繚子・武議》「起兵直使甲冑生蟻者，必為吾所効用也。」  
②《後漢書・種岱伝》「雖未建忠効用，而為聖恩所撥，遐邇具瞻，宜有異賞。」

#### 2、功效；作用。

- ③郭沫若《反正前後》發端「一言一動都應該以社会的効用為前提。」  
④統範亭《国難嚴重中記念国慶節》「迅速開放民主，發展民力，使各党、各派、各階層，皆能發揮其最大効用。」<sup>(8)</sup>  
(『漢語大詞典』 一九八六)

#### 1、その物の使いみち。その物を使う方法。用途。

- ①寧馨兒〔一八九四〕〈石橋思案〉九「製造所に必要なる諸器械の雛形を携へて、諸人に縦覧

せしめ、其効用（カウヨウ）を説明（ときあか）さん為に」

②尉繚子-武議「起兵直使甲冑生虱者、必為吾所効用也」

2、ききめ。効果。功能。効験。

③当世書生氣質〔一八八五～八六〕〈坪内逍遙〉はしがき「人の気格を高うすてふ自然の効用（カウヨウ）のなからずやは」

④歩兵操典〔一九二八〕第八三「次に遮蔽の効用を顧慮するに在り」

3、個々の人間が財貨や用役に対して感ずる主観的な欲望充足の度合い。

（『日本国語大辞典』 二〇〇二）

『漢語大詞典』（一九八六）の例文①②を見ればすぐわかるように、漢籍にあった「効用」は本来「VN 動詞-目的語」構造で、「力、あるいは能力を尽くす」という意味を表わす。そして、品詞で言うと、この「効用」自体は動詞である。一方、用例③④の「効用」は「VN 修飾関係」構造で、「効果、功能」の意味を表わす名詞である。『漢語大詞典』の用例を見る限り、「VN 修飾関係」構造の「効用」は中国語における歴史がかなり浅いように思われる。しかし、漢籍を調べてみたところ、下記用例（7）のように『旧唐書』に一例だけ、物を対象とする名詞の「効用」があって、その意味はまさに「効果、功能」となる。

（7）若金丹已成，且令方士自服一年，觀其効用，則進御可也。（劉昫『旧唐書』 九四五）

用例（7）のなかの「効用」は丹薬の効き目を指し、無論現在の「効用」と同じものであるが、しかし、以下の理由で筆者はこれがあくまでもイレギュラーな使い方と理解している。その理由（一）、物を対象とする「効用」はこの一例しかなかった。理由（二）、下記用例（8）のように、『旧唐書』には「觀其効用」のような表現はほかにもある。しかし、用例（8）の「効用」は依然として「VN 動詞-目的語」構造で、「力、あるいは能力を尽くす」という意味を表わす。

（8）仍遷綰為太常卿，充禮儀使，以郊廟禮久廢，藉綰振起之也，亦以觀其効用。

（劉昫『旧唐書』 九四五）

要するに、用例（7）の「効用」は物の丹薬を対象とし、一見して現代の名詞の「効用」と一致しているようにも見える。しかし、これはあくまでも特殊な使い方で、「丹薬が用を尽くす」と理解すべきである。これは「少睡始知茶効力、大寒須遣酒争豪」のなかの「効力」の使い方と実に似ている。

現代中国語の中の名詞の「効用」（効く用）は実は近代日本語から借用されてきたものである。一方、日本語の中の「効用」は『日本国語大辞典』（二〇〇二）の記述を見ると、坪内逍遙の『当世書生氣質』（一八八五～八六）が一番古かった。しかし、国立国会図書館デジタルコレクションで調べてみると、『当世書生氣質』より早かった用例はたくさんあった。

筆者は『経済小学』（神田孝平 一八六七）を調べた時に、下記用例（9）のように「効用」を見つけた。現時点ではこの『経済小学』が一番古かった文献である。そして『経済小学』における「効力」の使用を合わせて考えてみると、神田孝平が意図的に「効用」を使い出したと思われる。

(9) 此律ヲカルヘカラス然レトモ此律ノ効用ハ更ニ之ヨリ大ナル。(『経済小学』 一八六七)

#### 4 「効能」についての考察

考察の便宜を図るために、まずは『漢語大詞典』(一九八六)と『日本国語大辞典』(二〇〇二)における「効能」の記述を下記の通りに示しておく。

(1) 猶効力。貢獻才能。

①《尹文子・大道上》「慶賞刑罰，君事也；守職効能，臣業也。」

②唐・韓愈《為裴相公讓官表》「実群臣尽節之日，才智効能之時，聖君難逢，重徳宜報」

(2) 猶効率。

③瞿秋白《乱弾・財神還是反財神》「他們是在“提倡国貨”，更加有理由叫工人“增加生産効能”。」

(3) 猶功效；作用。

④胡適《易卜生主義》「法律的効能在於除暴去悪，禁民為非。」<sup>(9)</sup>(『漢語大詞典』 一九八六)

『漢語大詞典』(一九八六)の記述を見ると、漢籍にあった用例①の「守職効能」と用例②「才智効能之時」の「効能」は何れも本来「VN 動詞-目的語」構造であり、「能を尽くす」という意味を表わす。一方、用例③と④の「効能」は「VN 修飾関係」構造を成し、「効く能」の意味を表わす。しかし、『漢語大詞典』の用例を見る限り、「VN 修飾関係」構造の「効能」は中国語における歴史が浅いように思われる。

一方、『日本国語大辞典』(二〇〇二)を見ると、日本語における「効能」の初出は中村正直の『西国立志編』(一八七〇~七一)である。よって「VN 修飾関係」構造の「効能」も近代日本語から借用されてきたものである。

\* 西国立志編〔一八七〇~七一〕(中村正直訳)三・三「この赤水は、極純潔の心を以て用ひざれば、効能あらずとぞありける」(『日本国語大辞典』 二〇〇二)

上記のように、現代中国語の中では「効力」「効用」「効能」の三つは同時に「VN 動詞-目的語」構造と「VN 修飾関係」構造を有している。しかし、「VN 修飾関係」構造の「効力」「効用」「効能」は何れも近代日本語から借用されてきたものである。

#### 5 「効率」についての考察

「効率」に関して、筆者は複数の古代漢語データベースを調査して、下記用例(10)のように、文字列としての「効率」はあったものの、語としての「効率」はなかった。もとより古代中国語において「効~」の場合、たいてい「VN 動詞-目的語」構造で、「~を尽くす」という意味を成すため、「効率」(率を尽くす)を生み出す可能性はなかった。

(10) 遣劍州刺史陳誨、泉州刺史留從効率兵犯我無諸。(錢儼『呉越備史』 宋)

一方、現代中国語の中の「効率」は「単位時間内完成的工作量」という意味を成し、つまり「効率」イコール「効の率」である。そうすると、内部構成を言うと、「効率」も「VN 修飾関係」構造となる。「効率」がいつ中国語で使用され始めたか、黄河清（二〇一〇）は『新教育』（陶行知一九一九）を挙げているが、下記用例（11）（12）のように、もう少し遡ることができる。いずれにせよ、中国語では「効率」が二十世紀の初め頃使用され始めた新しい言葉であることは確かである。

効率 xiao lǜ 単位時間内完成的工作量。1919年陶行知《新教育》：責成效率：凡做一事，要用再簡便，最省力，最省時的法子，去取最大的效果。<sup>(10)</sup>（黄河清 二〇一〇）

(11) 蘇連提高生産效率運動概述。 (劉曙光『応用科学』 一九一一)

(12) 科学雑誌第一卷第十一期現已出版内有楊銓之（人事之效率）  
（申報『介紹新著』 一九一五年十一月十二日）

一方、日本語のなかの「効率」に関して、『日本国語大辞典』（二〇〇二）は一九二八年の用例を挙げているが、下記用例（13）のように実際はもっと早かった。

\*ガトフ・フセグダア〔一九二八〕〈岩藤雪夫〉三「タアビンは蒸汽の消費量が最も経済的であるし燃料に対しても效率がいい」  
（『日本国語大辞典』 二〇〇二年）

(13) 銲接手の效率（efficiency of joint）（即チ銲ノ原強ニ対スル接手ノ實際ノ強サノ比）  
（水谷叔彦『軍艦機関計画一斑』 一八九九）

## 6 「効果」についての考察

「効果」は「効率」と同じように、古代中国語のなかでは文字列としての「効果」はあったものの、語としてのものはなかった。現代中国語のなかの「効果」は「由某種因素造成的結果」という意味を成し、つまり「効の果」という「VN 修飾関係」構造である。「効果」がいつ頃から中国語に現れ始めたか、黄河清（二〇一〇）は『論英国憲政兩權未嘗分立』（嚴復 一九〇六）を挙げているが、用例（14）（15）のようにもう少し遡ることができる。

效果 xiao guo 某種行為或因素產生的後果（多指好的）1906年嚴復《論英国憲政兩權未嘗分立》：雖然，學者欲明此一哄之民之功分權界，与夫於一国所生之效果，理想繁重，難以殫明。<sup>(11)</sup>（黄河清 二〇一〇）

(14) 同盟国之效果。 (『北洋官報』 一九〇三)

(15) 英報論日本戰勝之效果 朝日新聞接倫敦發來特電云倫敦之諸新聞紙均極□日本軍於遼陽之戰勝甚効力實足使全世界之人心感動最多。 (各国新聞『湖南官報』 一九〇四)

一方、日本語のなかの「効果」に関して、『日本国語大辞典』（二〇〇二）は『仏和法律字彙』

(32)

(一八八六) を挙げているが、下記用例 (16) (17) のように実際はもっと早かった。

\* 仏和法律字彙 [一八八六] 〈藤林忠良・加太邦憲〉「EFFET. Koka, Dosan 効果、動産」

\* 国会論 [一八八八] 〈中江兆民〉「貴富人が往々政事に冷淡なるは畢竟性理自然の効果 (コウカ) とも謂ふ可き原因の存する有り」 (『日本国語大辞典』 二〇〇二)

(16) 「固ヨリ博識ノ理学ニ頼ラザレバ能ク効果ヲ致シ得ザルコトナレドモ」(森有礼・東京学士会院例会講演「身体ノ能力」明治十二年 (一八七九) 十月十五日)<sup>(12)</sup>

(17) ①第十一回 政府ノ元氣ノ善悪ニヨリ生スル處ノ効果ヲ論ス。

②第十三回 英國ノ風土ヨリ所生ノ効果。

③第十四回 風土ノ其他ノ効果。 (何礼之『萬法精理』 一八七五)

何礼之 (一八四〇～一九二三) の『万法精理』はモンテスキューの『De l'Esprit des lois』(一七四八年) の英訳本『The Spirit of Laws』を一八七五年に和訳したものである。下記 (17) のように、英訳本『The Spirit of Laws』に照らし合わせると、文中の「効果」は英語「Effects」の訳語であることが分かった。

(17) ① CHAP. XI.: Natural Effects of the Goodness and Corruption of the Principles of Government.

② CHAP. XIII.: Effects arising from the Climate of England.

③ CHAP. XIV.: Other Effects of the Climate.

何礼之の「効果 = effects」を究明すべく、筆者は一八七五年以前の英華字典類及び『大正増補和訳英辞林』(一八七一)、『和英語林集成』(一八七二)、『附音插图英和字彙』(一八七三) を調べてみたが、「効果」が見当たらなかったため、何礼之による造語か。要するに、現代中国語の中の「効果」も「VN 修飾関係」構造で、近代日本語から借用されてきたものである。

## 7 「効益」についての考察

古代中国語の中には文字列としての「効益」があったが、一語としてのものはなかった。それでは「効益」がいつ中国語の中で使用され始めたか、黄河清 (二〇一〇) は『生理衛生新教科書』(孫佐 一九〇七) を挙げている。ほかの近代資料を調べて、用例 (18) (19) のように、大体二十世紀の初め頃であることが分かった。

効益 xiao yi 效果和利益。1907年孫佐訳述《生理衛生新教科書》第二篇：凡運動必在曠野，蓋野外空氣清潔，吸之則精神倍爽，暢其血液之循環，以得新陳代謝之効益。<sup>(13)</sup>

(黄河清 二〇一〇年)

(18) 不窮理無以濬思想之靈慧，不樂羣無以収觀摩之効益，不學文無以辨記事之条理。

(申報 一九〇六年八月五日)

(19) 隨時演成淺說，曉諭民間，務使周知，以期養成立憲國民之資格。至於關係財政補助教

育、効益宏多、不勝縷指。

(申報 一九〇七年三月三十一日)

現代日本語のなかでは「効益」が使われていないが、『日本国語大辞典』(二〇〇二)の記述、そして用例(20)(21)が示した通り、かつて「効益」も存在していたのである。

\*東京日日新聞-明治一四年〔一八八一〕十一月四日「将来応に多少の効益を我貿易に与うる者あるべし」  
(『日本国語大辞典』 二〇〇二年)

(20) 共和政治ノ効益ヲ論ス。 (栗原亮一『泰西名家政治論纂』 一八八一)

(21) 物理学ヲ修ムルノ効益及ヒ其篇章ノ區別。 (飯盛挺造『物理学』 一八八二)

このように「効益」も近代日本語から借用されてきたものである。そして、中国の辞書は大体「効益」を「効果と利益」と解釈しているため、「効益」は「並列結構」と理解されがちであるが、本来「効益」も「VN修飾関係」構造の「効く益」ではないか。

## 8 「効程」についての考察

現代中国語のなかで「効程」は使われていないが、下記のように『漢語大詞典』には「効程」が収録されている。

猶効率 李大釗《我的馬克思主義觀》：然在實際上，同是值一万元的資本，他的生産効程決不一樣。  
(『漢語大詞典』 一九八六)

一方、「効程」は『日本国語大辞典』(二〇〇二)に収録されていないが、下記用例(22)(23)のように、かつて「効程」が日本語に存在していたことが分かった。

(22) 三行軍ノ効程 行軍ノカヲ保ツは夜間ノ休憩、朝食、適時良好ノ休憩地ヲ択フヲ。  
(レーネルト『軍隊指揮官之手簿』 一八八九)

(23) 労働者ノ労働効程ヲ知ラント欲スレハ先ツ労働者ノ労働時間トソノ賃銀額トノ関係ヲ詳カニシテ之カ統計ヲ求メサルヘカラス。 (東亜同文会『支那経済全書』 一九〇七)

上記のように、「効力」「効用」「効能」の三つは漢籍にあったものの、近代日本語において「VN修飾関係」構造の新漢語として成立され、また中国に輸入された。一方、「効率」「効果」「効益」「効程」の四つは漢籍に出典が見当たらず、和製漢語と見なすべきである。

## 9 「VN修飾関係」構造の二字漢語について

「効力」「効用」「効能」「効率」「効果」「効益」「効程」の七つが日本語において成立された「VN修飾関係」構造の二字漢語であり、日本独自の漢字知識によるものである。つまり、中国語では「効〜」の場合、「効」は一般的に他動詞と理解されるため、「VN動詞-目的語」構造の漢語をたくさん産出できたが、「VN修飾関係」構造の漢語を生み出すことができない。

「効」と似た現象は「持」と「視」などにも見られる。中国語では「持〜」の場合、「持」は一

一般的に他動詞の「もつ」と理解されるため、「持家」「持銃」「持身」などの「VN 動詞-目的語」構造の漢語を産出できたが、「VN 修飾関係」構造の漢語を生み出すことができない。一方、日本語の場合は「持論」「持説」「持病」のように、「VN 修飾関係」構造の漢語を生み出すことができる。陳力衛（二〇〇四）によると、『漢語大詞典』（一九八六）に「VN 修飾関係」構造の和製漢語である「持論」が収録されているが、漢籍にあった「VN 動詞-目的語」構造の「持～」に引きずられて、その語釈が一律「立論、提出主張」（論を持つ）となっていて、作者の本来の意図を誤解釈している。

另外導致誤釈的原因還有一個，即完全按中文漢語的構詞法來解釋日語借詞。如：將「持論」（卷六、553頁）釈為“立論、提出主張”我們堅持民族統一戰線的立場、持論和當時香港以及西南某些時論不同。（鄒韜奮、《患難余生記》第一章）<sup>(14)</sup>

「視」に関する造語も同じことが言える。漢籍にあった「視～」の場合、「視」一般的に他動詞と理解されるため、「視野」「視覚」「視力」などの「VN 修飾関係」構造の漢語をそもそも生み出すことができない。現代中国語の中にはある「VN 修飾関係」構造の「視～」の漢語を『漢語大詞典』で検証してみると、何れも用例が新しいものである。

一方、日本語のなかの「VN 修飾関係」構造に関して、野村雅昭（一九八八）<sup>(15)</sup>は『新選国語辞典（第六版）』（小学館 一九八七）から八五〇〇語<sup>(16)</sup>を抽出して、二十五種類に細かく分類した。造語力が一番高いのは「名詞-名詞の NN 構造」（牛乳）であり、「動詞-目的語の VN 構造」は8.6%で第四位、「動詞-名詞の VN 構造」は6.5%で第五位となる。要するに、日本語では「VN 修飾関係」構造は生産性の高い造語パターンである。

さらに沈国威（一九九〇）によると、中国語のなかの「VN 修飾関係」構造はその生産性が日本語に及ばず、近代において一定数の「VN 修飾関係」構造を持つ和製漢語が中国に逆輸入されたという。

近代以降、日本では西洋文明を吸収するため、数多くの新漢語が作られ、中国語もその恩恵を受けたことは周知の事実である。この近代の造語過程において、[V + N] 構造は造語型として、大いに活用された。その際、[右側ヘッド]の日本語では、[V + N]の構成体は、目的語抱き込みの動詞（[V + O] ⇒ V）より、装定的関係の名詞を形成していくのが自然のほうである。<sup>(17)</sup>

中国語では、漢字の [V + N] 構成体において、若し [動詞 + 目的語] の意味関係が成り立たなければ（例えば、自他動詞の行為者、道具場所のような二次的補足成分など）、動字の装定によって成語することが可能である。換言すれば、構造衝突の回避は動字装定の主要条件である。この意味において [右側ヘッド] の日本語では、少なくとも動詞的要素による装定を阻む統語構造上の制約がない。<sup>(18)</sup>

## 10 まとめ

本稿は現代中国語のなかの「効～」という構成を持つ漢語について、中日対照言語学の視点か

ら考察した。なかの「効力」「効能」「効用」の三つは「VN 動詞-目的語」構造と「VN 修飾関係」構造を同時に有している。そして、「VN 動詞-目的語」構造か「VN 修飾関係」構造かによってその意味合いが違ってくる。「VN 動詞-目的語」構造のものは本来漢籍にあったものであり、一方「VN 修飾関係」構造のものは近代日本語において成立されたものである。一方、「効率」「効果」「効益」「効程」の四つは漢籍に出典が見当たらず、何れも近代日本語において成立された「VN 修飾関係」構造の漢語である。

「効力」「持論」「視野」などの「VN 修飾関係」構造の漢語の背後に中日両国語の語構成の差異が見え隠れする。無論、中国語も「飛鳥」(飛ぶ鳥)「耕牛」(耕す牛)のように、「VN 修飾関係」構造の漢語を産出できるが、いろいろと制限されていて、その生産性は日本語に及ばない。よって、近代新漢語の身元を判断する時に、こういう語構成の差異が役立つはずである。

### 注

- (1) 「効当」と「効當」、「効実」と「効實」のように、単なる簡体字と繁体字の区別の場合、一つとしてカウントする。
- (2) 陳力衛. 東往東来 近代中日之間的語詞概念 [M]. 北京: 社会科学文献出版社, 2019: 253.
- (3) 羅竹風. 漢語大詞典 [M]. 上海: 漢語大詞典出版社, 1986: 6895. 必要に応じ、一部の例文を省略して、そして①②③④の通し番号をつけた。なお、『漢語大詞典』(一九八六)の記述を引用する時に、中国の簡体字を日本の漢字に書き直す。「饒」「們」などのように現代日本語で使わない漢字を異体字で示す。以下同様。
- (4) 本論文では JapanKnowledge に収録された『日本国語大辞典第二版』(小学館 二〇〇二)を利用する。
- (5) 佐藤亨. 現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典 [M]. 東京: 明治書院, 2007: 311.
- (6) 佐藤亨. 現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典 [M]. 東京: 明治書院, 2007: 311.
- (7) オランダ語版の原本は『Outlines of Social Economy』第二版 (William Ellis 一八五〇)
- (8) 羅竹風. 漢語大詞典 [M]. 上海: 漢語大詞典出版社, 1986: 6895.
- (9) 羅竹風. 漢語大詞典 [M]. 上海: 漢語大詞典出版社, 1986: 6896.
- (10) 黄河清. 近現代辞源 [M]. 上海: 上海辞書出版社, 2010: 818
- (11) 黄河清. 近現代辞源 [M]. 上海: 上海辞書出版社, 2010: 818
- (12) 佐藤亨. 現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典 [M]. 東京: 明治書院, 2007: 279.
- (13) 黄河清. 近現代辞源 [M]. 上海: 上海辞書出版社, 2010: 819.
- (14) 陳力衛. 《漢語大詞典》在处理日語借詞上的幾個問題 [J]. 日語研究 (2): 213.
- (15) 野村雅昭. 二字漢語の構造 [J]. 日本語学 7 (5).
- (16) 調査範囲は語頭字音が「ア」から「コン」までの二字漢語である。詳細な採取基準は論文をご参照ください。
- (17) 沈国威. [V + NJ] 構造の二字漢語名詞について 動詞語基による装定の問題を中心に、言語交渉の視点から. 国語学160集: 132.
- (18) 沈国威. [V + NJ] 構造の二字漢語名詞について 動詞語基による装定の問題を中心に、言語交渉の視点から. 国語学160集: 128.

(こ しんしょう 西安理工大学人文与外国語日本語学科)